もっと
福井の魅力を
知ってほしい
から・・・

ふくいの魅力探訪

ふくいの“お宝”ひとくちメモ

1947年5月11日　鎌倉文庫社員運動会を眺める高見順　提供：日本近代文学館

寄稿：福井県ふるさと文学館

VOL.07　スポーツと文学

作家とスポーツ

明治時代を代表する文学者の一人・正岡子規が「野球（のぼーる）」という雅号を用いたことはよく知られています。スポーツ好きの作家やスポーツをテーマにした物語は数知れません。

福井県出身の作家高見順は1943年、鎌倉に移り住み、川端康成や久米正雄などとともに、鎌倉文士と呼ばれていました。鎌倉文士たちは、戦時下の文化維持のため貸本屋鎌倉文庫を開店、戦後は出版社鎌倉文庫を立ち上げ雑誌『人間』を刊行するなど、様々な活動を行いました。

鎌倉文士たちは文化面のほかにスポーツにも力を入れました。高見順は1947年5月11日の日記に、鎌倉文庫社員の運動会でリレーや二人三脚などをしたことを綴っています。また、久米正雄や大佛次郎は文士野球団を結成し野球に没頭しました。これらのことから、鎌倉文士たちが、スポーツで親交を深めていた様子が分かります。

福井を描いたスポーツ文学

福井を扱ったスポーツ文学として、高校野球を描いた『俺たちの行進曲』や高校バレーを描いた『2・43清陰高校男子バレー部』などがあります。

有明夏夫『俺たちの行進曲』は1954年の福井を舞台にした青春小説です。越前高校音楽部に所属する三人組が福井市営球場で行われる鯖江高校との試合の応援に行き、精一杯演奏します。有明は1945年に祖父母の家がある福井に疎開し高校まで過ごしました。自身の体験も題材にして、三人が恋に熱中し青春を謳歌する様子を、戦災や震災から復興する福井の街に重ねて描いています。

壁井ユカコ『2・43清陰高校男子バレー部』は春高バレー出場を目指す高校生を描いた青春小説です。東京の強豪バレーチームに所属していた主人公は子ども時代を過ごした福井に引っ越してきました。幼馴染とバレーを始めますが、中学最後の大会で衝突。高校でバレー部に入部し再度全国を目指します。これらの作品には、福井の風景や言葉が登場人物とともに生き生きと描かれています。

県ふるさと文学館では、7月21日より10月14日まで、スポーツと文学をテーマにした夏季企画展を開催します。また、9月29日からは「福井しあわせ元気」国体・障スポ大会が開催されます。この機会にスポーツの魅力や、スポーツ文学の世界を感じてみてはいかがでしょうか。是非ご来場ください。

右　有明夏夫『俺たちの行進曲』関連資料
左　壁井ユカコ『2.43 清陰高校男子バレー部』
©壁井ユカコ / 山川あいじ / 集英社